

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314



国道182号線(新見市～福山市)と国道486号線(総社市～東広島市)が交差する十九軒屋の交差点から北東へ約500m、福塩線湯田村駅・道上駅の間あたり、神辺町徳田に立つ湯田原分教会。湯田村の地での布教活動も明治20年代から展開されたが、種々の事由から、教会設立は教祖40年祭・教会倍化運動の声を待った。

立教181年
5月号



お話し下さる島村先生

四月月次祭講話

自らが、問題意識を持って

なすべき事を考えよう

世話人 島村廣義先生

四月二十一日、大教会四月祭典

にご参拜くださった世話人・島村廣義先生は、かんろだいの節を通して教えられたことを台にして話を進められ、真柱様が示された「一手一つになる」ための道筋として、先ず、教え通りに心を沿うことが大切と話された。

続いて、かじもの・かりものの

教理から教えられる信仰のあり方を順を追って話され、陽気ぐらし実現のために、大恩に報ずる道であることを再確認された。

講話の要旨は次の通り。

▼誰が通る道なのか

昨年7月26日、ごどもおちばがえり初日の夕方、かんろだいを倒されるといふ節を見せられました。

かつて、このような事情はありませんが、この度は、倒されたかんろだいの各段を繋ぎ留めている「ほぞ」まで壊れてしまつて、仮の復旧すらできない状態になってしまいました。

2段までの状態となった姿を見て、

真柱様は、明治15年の事情を思い浮べたと話され、この春の大祭で、お互いの心の繋ぎ合いが欠けているとお知らせ、「一手一つになれ」とのお仕込みだと感じたと話されました。

「節から芽が出る」と教えられますが、陽気ぐらしをさせようとの親神様の深い思召から、私たちの成人を促すためのお手引きが、一人の「節」です。

この事情から、私たち自身がどのように思案するかですが、「おちばで起こった事情だ」と済ますのではなく、

我が事として捕まえ、真柱様のお諭しをどのように受け止め、自分が一手一つにつとめようと心を定めるのかです。

おさしづにも

一手一つに皆結んでくれるなら、

どんな守護もする。(明31・1・19)と諭されますが、親神様・教祖・真柱様に心を沿わせてご安心いただけるようなお互いの日々のつとめ方を、私は反省しました。

▼何を指して歩きはじめたのか

その第一は、それぞれの元一日、初代のご恩報じの道に立ち返ることだと思います。

かんろだいは、ちばに据えられた私たちの信仰の中心ですが、このかんろだいを囲んでかぐらづとめがつとめられます。

かぐらづとめの理を戴いて、銘々の教会でもおつとめをつとめますが、これは、教祖から、陽気ぐらしの世に立て替えるためのよろづだすけの道として教えられるつとめの理を戴いて、それぞれの教会においてもつとめるものです。

なるほど、おちばへ帰ってかぐらづ

とめを参拝しおちばの理を戴けますが、銘々の教会で、本当に、教え通りにおつとめ奉仕者の手が揃い、たすけ一条の心でつとめているかどうか。

また、たすけられた元一日の思いから、親神様の思召を聞き分けて信仰しているお互いですが、教会に繋がるよふぼくとして、そのをやの思いにしっかり心を沿わしておつとめを参拝しているかどうか。

思案のしどころはいろいろにあるでしょうが、元一日・初代の心に立ち返り、それを受け継ぐ者として、将来の陽気ぐらしの実現に向かって、我が自らがしっかり、親神様・教祖・真柱様に心を沿うてつとめることを、先ず、お互いに誓わねばならないと思います。

▼なんのための道なのか

それぞれに、この道に引き寄せられた元一日を思案すると、皆、身上なり、事情なり、無い命をたすけられた、成らん事情の中を治められたという日があります。

見せられる身上・事情を台にして親神様のお話しを聞かせてもらい、親神様の思召を聞き分けてこの道に入った

お互いです。

何を聞かせられたのかといえは、身上を台にして、先ずは、かしの・かりものの教理で、その根本は、人間を創られた親神様の思召と、創られただけではなく、親神様自身が私たちの身の内、また、世の中を守護され、私たちを見守り育てられている。それは、陽気ぐらしをする状を見て、親神様とともに楽しみたいと思召されたからだと、諄々と聞かせられました。

どうにも成らん苦しみの中からたすかりたい一心で、この親神様のお話しを聞かせてもらい、そして、親神様の御教えに縋り付いてたすけられた、その元一日、そのたすけられたことを台にして、この親神様のご恩・ご守護を聞き分けてのお道です。

おさしづに

大恩忘れて小恩送るような事では
ならんで。これ、一つの心に第一
治めてくれにやならんで。

(明34・2・4)

という御言葉があります。

前述のたすけられたことは、このおさしづで仰る「小恩」で、小恩を台にして、親神様の「大恩」をしつかり心に治めて、大恩にお応えする道を、お

互いに通ることが大切です。

▼自分の体は、誰から借りているのか

直接、身上・事情をたすけられたのではなく、教えに感じて入信したという方もおられましようが、多くは、身上・事情をたすけられて「ありがたい」という感謝の喜びに、何とか神様にお報いしたいとなり、それが大恩を報じることとなります。

おふでさきに、

にんけんハみなく神のかしものや

なんとをもふてつこているやら 三・41

にんけんハみなく神のかしものや

神のちうよふこれをしらんか 三・126

めへくのみのうちよりのかりものを

しらずにいてハなにもわからん 三・137

と教えられますが、人間そのものも自分の力で生まれてきたものではなく、この命も、すべて親神様の創られたものを親神様からお貸しいただいて、この天地抱き合わせの親神様の懐で、親神様の十全のご守護を戴いて、私たちは、こうして暮らしています。

かしの・かりものの教理が教えの台と教えられますが、親神様からのかりものだということが、本当に心に治まらないようでは何も分からないと仰

せられます。親神様は、この世のすべての創り主であり、創造されただけではなく、守護される本元のをやです。

▼借りた物はどう使うべきか

私たちは、病んでみて初めて、身上健やかにお連れ通りいたたくご守護のありがたさに気付きますが、たすられたといつても、日々「当前」と思っている姿に戻る(たけの)ことで、それ以上によくするのはありません。

心だけが、私たち自分の物であると教えられますが、その心に相応しく、この身の内をお借りして、この世で暮らしている。その暮らしている意味は、陽気ぐらしをすることです。

陽気ぐらしをするために、日々、親神様の思召に適うた心遣いで通れば、それが一番良く、それが陽気ぐらしへ向かう、私たちの生き方ですが、心の自由を許されているがゆえに、わがまま自分勝手な心遣いで、日々通る一つの姿が、世の中に、いろいろと見せられる事情・身上に繋がっています。

かしの・かりものという御言葉で示されている通り、貸し主、また、借りている私たち自身が、お互いの物の貸し借りを想定していると思案す

ればよく分かりますが、「この人は、貸した道具を、本当に丁寧にきれいに大事に使うてくれる」から「今度、借りにきたら、また、上等な物・素晴らしい物を貸そう」となりますが、いい加減に使って壊したり、傷付けて返すなら、「もう、この人には貸すまい」というのが、人間関係における貸し借りです。

また、借りても、利子を添えて御礼を申して返す方もあれば、踏み倒すようなこともあったり、人様々ですが、一番は、貸してくれた人の思いを、自分も重く受け止めて、貸し主に対する敬意を表して大事に使い、それを、また、返すことが大切だと思います。

▼出直によって、なにをやり直すのか

私たちのこの身上も、心通りに使う身上に相応しくお貸しいただいていますが、これには限りがあつて、お返しする時があります。

かしの・かりものの教理には、出直という教理がついて回ります。

世の中で、生きることの終決を意味する「死」という言葉は「後がない」ことを意味しますが、天理教の「出直」には「最初から新しくやり直す」、こ

の世で再び命を得て、新しく再出発するといふ意味が込められています。

我がの物と仰せられる「心」とお借りする「体」とで人間が成り立っていると思えますが、人間の体は親神様からのかしもの、人間が親神様から借りた物、これが、すなわち、かしもの・かりもの

の教理です。この体を借りることによって、命ある物となり、そして、出直とは、この体を親神様にお返しすること、教祖は、古い着物を脱いで新しい着物と着かえるようなものと教えられます。

親神様の守護によって、人間は新しい体を借りて、また、この世に出直して帰ってくる。ここに、この世における人間の無限の命を分らせてもらえます。

教祖は、明治8年、三女・こかん様が出直されたとき、

「可愛相に。早く帰っておいで。」

と、優しく犒ねむらわれた。(伝・六章)と示されていますが、これは、人間がこの世に生まれ更わって出直してくることを教えられたものと思えます。

おふでさきに、

このたすけ百十五才ぢよみよと

さだめつけたい神の一ぢよ

三・100

と誌されるように、115歳まで置いてもらい、大往生で身上をお返しして生まれ更わるのが理想ですが、それぞれ的心遣いや成人の未熟さから、それまでに身上をお返しすることが多いのです。

▼何のために出直すのか

お道を信仰することは——私たちが、こうしてこの世で生かされている内に、心の出直をし、心のほこりが元となった、それぞれのいんねんを切り替えて暮らすこと。それぞれの心のほこりに基づいたいんねんをきれいに納消して通り、その天寿を全うし、また新しい身上を借りてこの世に生まれてき、一步一步成人の道を歩む姿。——

この考え方、教えは、元初まりの理に基づいたお話だと思えますが、人間が幾度も幾度も出直を繰り返す、その出直を通して人間が成人する姿に過程が、元初まりのお話の中に悟られます。陽気ぐらしをさせたいという人間に對しての親神様の深い思いを、それぞれが見つめ直すときに、次の新しい世界へのチャンス・機会として、この出直を捉まえる。出直を、単なる「生」の繰り返しとして考えるのではなく、

飽くまでも陽気ぐらし世界実現を目指して発展していく過程の、一つの大きな契機であると思案しながら、そして、命ある現在の生き方をしっかりと心正して、思召に沿う通り方をする。

お道ならではの教理で、かしもの・かりもの・出直をしっかりと心に治め、そのうえで、大恩に報ずる道をしっかりと心定めて通ることが、一番、大事な道の通り方だと思えます。

▼道を引き継がねばどうなるのか

教祖は、小恩を通して大恩を諭されますが、たすけられた喜びにお応えする報恩の道、ご恩報じの道として、自分のたすけられたことを人に話し、人をたすけることが、親神様への一番のご恩報じだと教られます。

おさづけを頂戴したときの、その定めた心に、それぞれが、今一度、立ち返って、しっかりと、たすけ一条の心を生涯の心として守って通る。その心に親神様が入り込まれ、たすけ一条のお働きをして守護されるといふことを、しっかりと、心に治めねばなりません。もう一つ、大事なことは、ご恩報じの道を「自らが」通るだけではなく、

後に続く者にしっかりと引き継いでいくことです。そうでなければ、陽気ぐらしの輪が世界に広がっていきません。

自らが通るとともに、初代から受け継いできた道すがらを後に続く者にしっかりと引き継ぐ、伝えていくことも、私たちの大事なつとめです。

教会事情を考えてみると、現在、会長が定まっていな無担任の教会が、全教挙げて数えるとかかなりの数になりますが、ちゃんと信仰が伝わっていない、後任者に受け継ぐ心が定まっていないからでしょう。

それは、先を歩んでいる私たちの責任でもあり、しっかりと、真実をもって丹誠していくことが望まれます。

これは簡単なことではありません。教祖も、50年のひながたをもって、つとめ人衆を寄せられ、おつとめを教えられ、陽気ぐらしへと導かれる。そのひながたは、簡単な話ではなく、一番苦勞されたことは、人を育てていくことでしょう。

私たちも、このひながたに学んで、しっかりと、丹誠せねば、この道は末代へ亘って繋がっていきません。

私は、東西礼拝場ふいんのときに、

ヒノキの用材を四国から調達する御用をつとめました。

昭和ふし心(昭和初期の南礼拝殿・教祖殿のふし心)のときには、私の祖父が同じ御用をつとめました。用材が見つかったとき、二代真柱様が四国の山奥へ視察に入られました。そのときに歩かれたコースを、私も一度、辿って歩いてみました。

すると、昭和の初めに用材を伐り出したその切株のところに苔が生し、その横に若木がすくすくと育っている姿が見えました。昭和ふし心から50年、その切株の元から若木Ⅱ後に続くものが確実に育ってきている姿。何とも言えぬ景色に感激を覚えました。

教会活動やいろんな御用をつとめる中に、自らの御用がお役に立っていることだけではなく、このヒノキのように後に続く者を育てる丹誠がちゃんと行き届いているかどうかを、献木の御用を通して、いろいろと考えました。

親神様の広大無辺のご守護のもと、育み育てられている原生林の天然ヒノキが、代を重ね、旬の命を受け継いでいくように、教祖に導かれながら、たすけ一条に歩み抜かれた初代の先人たちの信仰を、私たち自身も、自らが素

直に受け継ぎ、それをしっかりと次に伝えていかねばと思いを新たにしました。

今、大事なことは、人材。陽気ぐらゐの世の状を一日も早くご守護いただけるように、人を育てることの大切さを、真柱様は仰います。

一朝一夕にできることではありませんせんが、年祭を期に後継者講習会を開催されたこともその一端です。全教で2万1千人を超える方々が、受講されましたが、「受講いただいた、ありがたかった、良かった」ではなく、その方々が、たすけ一条の御用に立ち働くのには、ひとつ、一緒にお連れ通りたいて、たすけ一条の御用をつとめるよふぼくへと、手を取って導きお育ていただきたい。

▼どのような道を引き継ぐのか

『天理時報』(3月18日号)に吉川隆之さんと人材育成コンサルタントのインタビューが載っていました。人材育成の現場で昔のやり方が通じないことについて、その背景を答えています。——少子化によって競争がなくな

った。モノが潤沢にあり、もらえて当然という感覚が染みついている。小中学校の評価制度が、他人と比較する「相対評価」から個人の力量に焦点を当てる「絶対評価」に変わった。

しかし、この変化を「ゆとり世代」などと揶揄するのではなく、変化の本質を知ることが大切として、評価方法が「競争と結果」から「成長とプロセス」に移行したと指摘、その結果、いまの若者が競争の順位よりも、頑張つて成長し、貢献したことを褒められることを大切にすると述べています。

また、これからは、相手の話に耳を傾け、一人ひとりに寄り添うことが大切として、そうした中に、相手の必要としているものが見えてきて、「自分で考えて行動できる人」に育つてくれると話しています。

私は、この話を読んで、ことさら学術的な喋り方で仰っているが、これは、教祖のひながたに示されていることで、教祖御自らが口に筆にまた行動に起こして人を導き育てられたそのひながたをしっかりと心に治めて通れば良いことだと思いました。

大事なことは、自らが連れて通ること。後継者を育成していくうえに、親

がその台となりませんが、自らがしっかりと道を求めて成人の道を歩むとともに、それを一緒に連れて通るといふ姿勢が大事なことを教えられたように思います。

これからは、この「後継者育成」が課題で、この道を受け継いでくれる者、若者を育てていくうえで、しっかりと心を砕いてつとめたい。

教会の活動としては、婦人会・青年会・少年会・学担があり、それぞれに各会の思いで活動を進めてはいますが、各会がでんでんにするのではなく、真柱様の諭される「手一つになる」こと、お互いが連携し助け合いながら一つの目的に向かって心を繋ぎ活動が続けることが大切だと、かみろだいの事情によって示されたものと思います。

その点を、ひとつ、お互いにしっかりとあらためて自分の立場で受け止めて、これからの活動を進めたいと思います。

《以上、要約》



本部婦人会総会開催
御臨席総会へ向けて……
婦人会

婦人会総会後の支部行事

常任委員 上原 順子

4月19日、婦人会第100回総会を終え、笠岡支部の婦人会員は中庭から東泉水プール前広場へ移動しました。

本年は婦人会本会での行事は行なわず各支部に任せられるということで、笠岡は全員で十二下りのてをどりをさせていただくことになりました。

婦人会は来年6月23日に御臨席総会をさせて頂きます。

その日に向けて、理のあるおつとめを共に勤めることで会員一同の心を一つに揃えたいという支部長様の思いに添っての行事でした。

晴天で初夏のような日射しの中、200人余の人々が整然と並んで11時45分から勇んでつとめました。

年輩の方や身上のある人も、案じられながらも最後までがんばったり、足腰が不自由な人は荷物を置いたビニールシートの上で唱和したり、手を振つ

たりして共につとめ終え笑顔で帰途につきました。支部長様から手づくりのメッセージと飴をおみやげに。

「はじめのうちは大丈夫、続くかな？」と案じてたけど、いつの間にか皆さんの勢いにつられて気がついたら最後まで踊れてました。」という声もありました。

今回の行事が各人の今後の勇みにつながって、来年の総会を迎えられたらと願っています。

**「親里管内学生
新入生歓迎会」開催**
4月22日・笠岡詰所
学生担当委員会

学生担当委員会(山野弘実委員長)は、4月22日、笠岡詰所で親里管内学校の新生歓迎会を開催した。当日は、天理高校・教校学園・天理大学・白梅寮・天理教語学院・専修科の学生16人が参加した。



自己紹介する管内学生達

学生達は、まず、自己紹介などのアイスブレイクで緊張をほぐし、山野委員長の話を聞いた。その後、会食(バーベキュー)をしながら、互いに学校生活や近況を話し合った。午後からも親睦を深めるプログラムが行われ、笠岡に繋がるおちばの学生同士の絆をより深めた一日となった。

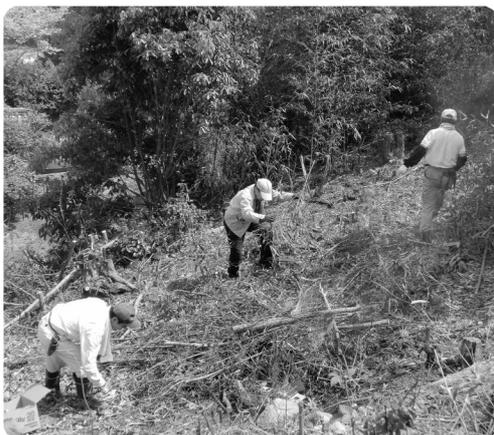


おちばで学ぶ学生達一同

**大教会住宅
北側斜面の整備**
行われる
**管理部
青年
部会**

管理部(虫明立生部長)は4月22日(日)、青年会(上原勇委員長)と合同で大教会住宅北側斜面の整備を行った。

午前9時からアカシヤや竹の雑木をチェーンソーや鋸を使って伐採し、その後、下草の整理を行った。竹などの長い物は裏に運び、枯れ物はその場で焼却処分にした。昼食後、火の後始末をし解散した。斜面での足場の悪い中、アカシヤのトゲに苦辛しながらのひのきしんだった。



滑りながらもひのきしん

全教野球大会 岡山教区予選開催

笠岡ワールド
ブラザーズ

本部布教部主催の全教野球大会の岡山教区予選、決勝が、4月28日、岡山市で開催され、笠岡大教会チームである、笠岡ワールドブラザーズ(北川勇治監督)は、岡山東・東部・倉敷支部合同チームと対戦した。

試合は、1回表にいきなり2点を先制されるも、その裏に岡秀明(上父)の3ランホームランで逆転。その後は両チームの取り合いとなった。投げては、枝広大樹(東福山)の粘りのピッチングで、5対4の1点差の試合をものにした。



笠岡「ワールドブラザーズ」メンバー

笠岡ワールドブラザーズは、岡山教区代表として、10月に親里で行われる全教野球大会に出場する。

第11回 大教会長杯 親睦スポーツ大会開催

5月6日



今年こそは晴れ? 昨年は台風の直撃の為、前日で中止を決定。今年も前日予報は夕刻より雨、しかし当日になると予報が午後から雨に変わっていた。そんな中でも7ブロック110人の人達が参加し、観客を含め130人が集まる大変な盛り上がりになった。初めての顔も沢山見かけ、それぞれの教会が、この行事を通して日頃繋がっていない人達への繋がりも図って下さっていると感じた。また目的である笠岡内のブロックを越えた親睦も、一日を

通して笑いあり、優勝目的以外の盛り上がりもありだった。毎年ながら、大教会長様から任せられた数人のスタッフでは到底熟すことのない出来事、準備から当日の運営、片づけまで喜んで下さる優秀なスタッフがあつての行事成功と、心から感謝いたします。婦人会の方の美味しいカレーも有難うございました。
尚優勝は高屋、準優勝は福山・上下、3位は久松ブロックでした。
(大会実行委員長 上原志郎)



みんな、よく打ちました

談話室



今日一日の感謝

大教会 谷本篤子

4月18日教祖誕生祭、19日の婦人会総会に、母・私・娘・義妹と四人で参加させて頂きました。

母は高齢で歩行困難で迷惑を掛けるのではと思いためらっておりました。先々月講社祭に来られた理の親の奥様から娘に「お祖母様に、お声掛けして下さいませんか？」とお話しが有りました。娘は直ぐ電話をしました。「おばあちゃん、三世代で参加させてもらうって凄い事よ」って伝えたそうです。その言葉に励まされたのか「今回は元氣を出して天理に帰らせて貰う」と母が言ってくると娘から聞きました。先月の大教会の直轄祭で理の親の奥様とお会いした時、お尋ねすると「もう、申し込み頂いております。祐三子さんによろしく」とおっしゃいました。母は私の体調が安定しているのを感謝して教祖にお礼をと思い天理に帰ってくれたのだと思います。

娘は介護福祉士で施設で働いて居ります。前職場・現職場に熱心な信者さんが居られます。お道の話しを聞いて感銘を受けております。日々の生活の中、感謝で一杯です。

今年の3月の本部月次祭には、息子と一緒に弥高山から帰らせて頂きました。実は以前、前弥高山分教会長様の体調が優れぬ時、3月に本部月次祭に連れて帰って下さいました。(次の月4月から再入院となられ、残念ながらその年の12月に出席しませんでした。)帰笠し教会でお礼の参拝をしました。お疲れの様で直ぐ自室に向かわれましたが帰宅しようと私達が立ち上がっている所に戻って来られて「峻君、また一緒に天理に帰ろうな」とニコニコ顔で言われたのを今でも思い出します。息子はこの約束を守ってその後も3月の本部月次祭には必ず「おちば帰り」をして居ります。

今年、東講堂でおやさ講演会をお聴きする機会を得ました。講師は高屋分教会の武内正美先生でした。内容は里の御両親の単独布教時代のご苦労話等で、聴衆の方々の中には思わずハンカチを目に当てておられた方が居りました。続いてお祖母様、お父様が身

上(ガン)になられたお話しでした。どんな中もおやさまの「ひながた」を辿られ、たすけ一条の道を貫き通された御生涯をお聴きして感動しました。講話をお聞きして、皆それぞれ感銘を受ける所は違うと思いますが「神様が必要としているから此処に置いてください」と言う言葉が、同じ身上(ガン)の私には心深く残りました。

親神様は成人を望まれる様ですが、個々の成人の具合を見てくださっておられる様です。余命を宣告されている私ですが、これからも生かされている日々感謝して、その場その時を精一杯喜び心で通らせて頂きたいと思っております。

タンザニア 訪問記



大教会 上原望美

今回、初めてタンザニアに行かせて頂いて、自分がお道を通る者としても、人間としても、まだまだ未熟だという事、何事も感謝して日々通らせて頂かなければいけないという事を深く感じ

させて頂きました。

私が声をかけたことから繋がった道でありながら、中学生の頃までは、タンザニアという国に布教をしに行く事に好意を抱いてはいませんでした。高校生になり教校学園で教えを学ぶ中で、天理教という信仰が自分の支えとなり、成長させて貰えるもの、自分にとっても他の人にとっても大切な教えになるのだと感じました。その教えを多くの人に知ってもらい、助かってもらいたくて、今回タンザニアに行かせて頂きました。また個人的に、タンザニアという国はどういう国なのか深く知ってみたいという思いもありました。

タンザニアおたすけの中で一番心に残っているのが、マアニ孤児院に行かせて頂いた時の事です。そこでは身上のある子供が多く、日本だときちんとした治療が出来るのにこの国では医療の技術が進んでないため助かる子も助けられない現状を、知ってはいましが痛感しました。孤児院ではおさづけを取り次ぐ以外に子供と遊ぶ事も目的でありましたが、子供達と遊びたいという気持ち湧く事が出来なくて、自分がこの子供達に何をしてあげられる



アマニ孤児院で子供達と



おたすけ先で子供と時間を過ごす



友達になった大学生のモエシャ

のだろうとずっと考えていました。それでもおさづけは取り次ぎたくて、子供を探していたら、奥の部屋から先生に車椅子を押され女の子が、みんなの遊んでいる庭に来ました。父にその子の事を聞くと、孤児院に来た時には父親の虐待による精神的なものから脚が歩けなく話す事も出来なくなつたと言われました。その子におさづけを取り次ぎさせて頂こうと思ひ声をかけて取り次ぎさせて頂きました。その子は取り次ぎさせて頂いている時、一回も私の顔を見ようとはしませんでした。取り次ぎが終わってお礼を言つてその子の隣に座っていると、周りの遊んでいる子供達を羨ましそうに見ていました。そし

て男の子が日本から持ってきたシャボン玉を女の子の横で作っていたら、その子が「あーあー」と言いながら怖がりながらも楽しそうに遊び始めました。横で私も笑いながらみていたらその子も笑顔になつて笑い合いました。その子に飴をあげるととても喜んでくれて嬉しかったです。何度か二人で笑いあつていたら帰る時間になつたので、その子に帰ることを伝えると悲しそうなお顔を見せました。その時は、隣で一緒にいてあげるだけでも人を助けることができる事を知りました。医療の進歩はとても大切な事ですが、隣で笑いあえる存在は人の心を支える上でとても大切なものなのだとということ

を知りました。またタンザニアに行き、親神様を近くで感じさせて頂くことも沢山ありました。毎日スケジュール通りに動く事が出来ない日が多く、おたすけの為に来させて頂いているのにとモヤモヤしていました。ふと親神様にお願ひさせて頂くようお願い、毎日する朝づとめの時に「今日はスケジュール通りに動く事が出来そうですよ」とお願ひさせて頂くと、その日は一日きちんとスケジュール通りに進む事ができました。その他にも、今回のチームの中で女性が私一人しかいないので不安になる事が沢山ありました。悩みを話す事が出来る相手もいなくてつらいなあ、女の子

がチームにもう一人いたらなあと思つていたら、次の日にホテルの従業員の女の子に話しかけられて仲良くなるこゝとが出来、その後ホテルの従業員のほとんどの女の子と仲良くなれました。タンザニアという国に行き、日本と大きく違う環境の中で毎日一つ一つに気を使いながら生活をしなければならず、何不自由なく生活できる事の有難さをとても感じました。また家族や友人、自分に関わる人達がどれだけ大切な存在であるかを考えさせられました。またいつかスワヒリ語をレベルアップさせてタンザニア布教に望みたいと思ひます。

四月月次祭祭文

此の笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいませ

親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます

親神様には子供かわいい一条の親心から 常に私共をお見守り下さり陽気ぐらしが出来ると御守護下さるだけではなく 旬刻限の到来を待つて教祖を月日の社とお定めになり 陽気ぐらしへとお導き下さっております事は誠に有難い極みでございます 私共は教祖に無い命を救けて頂いたり 教えを通して心一つを救けて頂き 親心に触れこの世の 真実を知り ご恩報じの思い一筋に日々は朝夕に御礼申し上げつつ つとめとさづけを通してたすけ一条の御用の上に努め励ませて頂いております 特に今月十八日は教祖の二百二十回目のお誕生日を迎え おぢばで又それぞれの教会でお祝いを申し上げますと共に 今までと変わらぬ親心を以て陽気ぐらしへとお導き下さるようお願いをさせて頂きました 加えて婦人会第百回記念総会に誘い合わせて参加させて頂き 一手一つに力強く成人の歩みを進め育成にも力を注いで行く事を誓い合わせて頂きました

その中今日の吉日は 此の大教会の四月の月次祭を執り行う日柄でございますので只今よりおつとめ奉仕人一同喜び心も一入に 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめさせて頂きませす 御前には春の陽気にも誘われ今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が 同じ思いに伏し拝み共に声高らかにお歌を唱和し尚も変わらぬ親心にお縋りする様をご覧下さいまして親神様にもお勇み下さり神人和楽のひとつときをお現し下さいますようお願い申し上げます

さて本日は世話人 島村廣義先生の御参拝を頂いておりますので 後ほどお話しをお聞かせ頂きます しつかりと心に納めおぢばの声に応えられるよう成人の歩みを進めさせて頂く所存でございます 又今月二十九日は全教一斉ひのきしんデーでございます 日頃ひのきしんに励ませて頂いておりますが この日は世界中が心一つに合わせて勤めさせて頂く喜びを胸にひのきしんに励ませて頂きたいと思ひます 更には又来月は直轄教会に巡教をさせて頂きませす 教祖ひながたに込められた親の思いを思索し その思いに込められるよう精一杯成人の歩みを進める事を申し合わせて頂く所存でございます

何卒親神様には 教祖ひながたを胸に誠真実を尽くして成人の歩みを進める皆の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に尚一層自由の御守護を賜り 親心に触れこの世の真実に目覚め 欲を忘れてご恩報じに徹する人が弥増して 陽気ぐらしに少しでも早く近づけますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

こころの詩

笠岡の教友が選ばれ掲載されてきましたので転載いたします。(敬称略)

▼『天理時報』

▽4月22日付「時報歌壇」

・海松ヶ岡◎ 藤井光子さん

三日ほど日記を書けず五日して

「夫癌告知」と記す夕暮れ

・海松ヶ岡◎ 池田広子さん

つとめ衣に着替え勇んで神殿へ

海の香りに背中押されて

・福満◎ 福島悦子さん

仕合わせは絹衿締め糸通し

掛け衿付けぬ八十九にして

▼『陽気』誌4月号「道柳」より転載。

巻末の「お詫びと訂正」をご覧ください。

さい。

▽準秀詠

・東悠◎ 田林美智子さん

感謝なる孫より受けしさづけの理

▼『陽気』誌5月号「道柳」より転載。

▽佳 詠

・東悠◎ 田林美智子さん

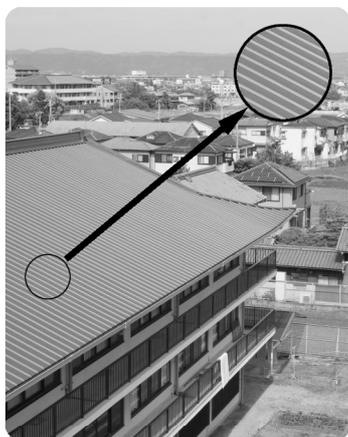
目に見えぬ自由の守護いと尊

▼表紙写真

(吉岡輝昭かさおか編集部員)

立教百八十一年 四月月次祭 祭典役割表

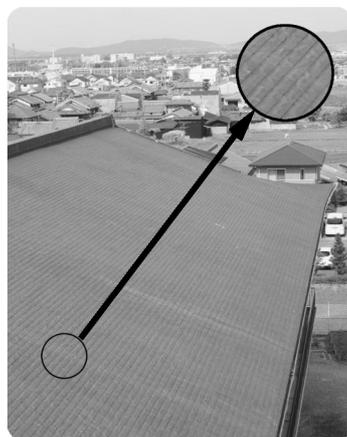
胡弓	三味線	琴	小鼓	すりがね	太鼓	拍子木	ちゃんぽん	笛	おつとめてをどり				地方			役割 区分	講話	祭主		扨者	
									大教会	上原	上原	上原	上原	中島	佐藤			島村廣義先生	大教会	上原	中村
今川佐智子	上原順子	虫好美	赤木素志	森本忠平	笹尾正治	谷内伸自	中村義太郎	上原浩	門脇郁子	田中ますみ	大教会奥様	上原繁道	上原明勇	大教会長様	上原繁次	中島誠治	佐藤道孝	島村廣義先生	大教会長様	上原志郎	中村道德
三島照美	中村初美	佐藤香苗	浅野明教	上原志郎	杉原博之	高木昭祥	森本忠善	内海史郎	門脇加津	谷内美知子	武内正美	中村道徳	今川昌彦	中村剛	山田敏教	横山逸郎	上原明勇	六月講話	高木昭祥	佐藤真孝	指図方
室悦子	田中つかさ	岡崎豊次	上原繁次	虫明立生	武内清明	渡邊隆夫	中島誠治	佐藤真孝	山野なつ	横山小智榮	内海安子	三島真一	岡崎真一	門脇元教	岡田誠	田林久嗣	吉岡誠一郎	上原浩	高木昭祥	佐藤真孝	上原明勇



改修後(北棟)



改修前後(渡り廊下接続部)



改修前(南棟)

◎詰所北棟屋根及び渡り廊下屋根修理
笠岡詰所の懸案だった雨漏りの修理につき、詰所北棟屋根・渡り廊下屋根の部分を、2月5日補修工事に掛り3月14日完了した。

大教会だより

|| 辞令 ||

立教181年4月21日付

◎登用

承事 横山逸郎
准承事 三代温生

◎教人講習会修了者(前期)

立教181年5月1日終講
弓ヶ濱 森川道弘

◎教人講習会修了者(前・中期)

立教181年5月6日終講
明石市 杉原輝夫

◎修養科一年講師

立教180年4月
立教181年4月
明石市 杉原善朗

◎本部食堂ひのきしん

立教181年5月1日
立教181年5月15日
自 立教181年5月1日
至 立教181年5月15日
神昭渡邊泰夫
品治渡邊泰夫
神昭渡邊泰夫
品治渡邊泰夫
神昭渡邊泰夫

◎教祖御誕生祭・婦人会総会詰所受入ひのきしん

- 自 立教181年4月17日
- 至 立教181年4月19日
- ・東ブロック 明石市 杉原 美津枝
- ・西ブロック 美之郷 桑田 恵美子
- ・福山ブロック 福昭 平盛 典子
- ・高屋ブロック 稲倉 藤井 宏一
- ・島根ブロック 照雲 雑賀 元生
- ・上府ブロック 甲井 山田 信子
- ・その他たくさんさんの有志の方々

◎立教181年定期巡教

- 福山 大教会 長様
- 高屋 大教会 長様
- 神邊 武内 正美
- 島根 上原 繁道
- 久松 佐藤 道孝
- 鶴山 大教会 長様
- 弥高山 上原 明勇
- 陽備 上原 繁道
- 摩耶 門脇 元教

- 金浦 佐藤 道孝
- 興明 大教会 奥様
- ひろさと 大教会 長様
- 陶山 門脇 元教
- 芳井 大教会 奥様
- 呉照 佐藤 道孝
- 海松ヶ岡 吉岡 壽
- 東悠 上原 明勇
- 吸江 佐藤 道孝
- 照陽 上原 明勇
- 輝美濃 上原 明勇
- 新山邑 吉岡 明勇
- 皆部 大教会 長様
- 明石市 門脇 元教
- 上府 上原 繁道
- 府中市 武内 正美
- 東城 大教会 長様
- 服部 門脇 元教
- 島中 中村 剛
- 驛家 大教会 奥様
- 油木 大教会 長様
- 葦陽 中村 剛
- 湯田原 大教会 奥様
- 備中 門脇 元教
- 神昭 中村 剛
- 美之郷 大教会 長様
- 錦備 上原 明勇

※お詫びと訂正

本年4月21日発行の『かさおか 第57巻 第4号』8ページ「心の詩」に『陽気』誌4月号「道柳」より転載。として3首の歌を掲載しておりましたが、これらは平成16年の「4月号」に掲載されたものでした。同号の「談話室—磨き上げれば」を参照のため古い『陽気』から誤って転載いたしました。

読者の皆様ならびに関係者の皆様にご迷惑をお掛けしましたことをお詫びするとともに、ここに訂正させて頂き、『陽気』誌本年4月号に掲載の歌は、本号の「心の詩」に転載いたします。

訃報

串田幸恵姉

福中分教会長
5月1日出直されました。
享年 93才



3月15日講社祭りに行く。庭に濃い真つ赤な大輪の花が咲いている。「あれ、何の花?」「牡丹の花よ。会長さんは花のこと、何にも知らんのやねえ」と97才のお婆さんに言われる。(私も73才のお爺ですが)そう、私は花の名前も知らんし、他のことも何にも知らないんです。えろう悪かったなあ、と言いたいけど相手は97才のご高齢……。

でもこんな言い回しは知っているよ。「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花。何れがあやめかカキツバタ……」。ここで皆様に質問です。あなたの女房は花に例えると……? いや失礼しました。「何が花に例えることや」と怒られますね。僭越ですが私の女房は例えるとヒマワリです。機嫌が悪いときにこう言う。「誰々さんが言うとなつたよ。奥さんはヒマワリの様な明るい人やね!」するとすぐ機嫌が直る。簡単至極、特效薬です。しかしこのヒマワリにはバラの様に美しく……なくてしかしバラのようにトゲが有るので。あぁ!。(U)